

# 特集『耕畜連携』

耕畜連携とは、稲や野菜などを**耕**作する農業と、乳牛や肉牛を育てる**畜**産業が連携し、資源の循環を作るしくみです。

問い合わせ先 産業活性課（☎43-7131）



府中市の北部に位置する上下地域は、昼夜の温度差が大きい気候を生かした良質米の産地であり、アスパラガス、マロン南瓜、ほうれんそうなどの野菜栽培や、乳牛などの畜産も行われている地域です。

農業・畜産従事者の減少は、地域過疎化の要因の1つです

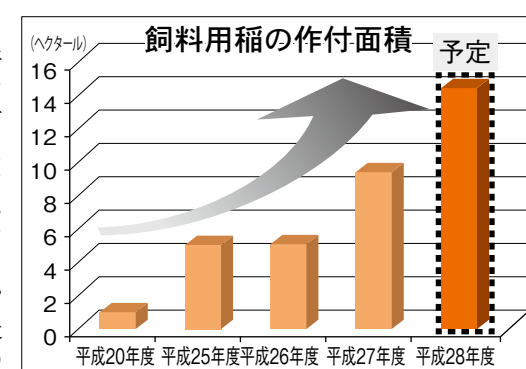
平成16年に、府中市内で初めての農事組合法人が設立され、規模拡大に着手しているものの、市内の農業経営は依然として小規模で兼業が多いのが現状です。農業従事者の高齢化や後継者不足、農家戸数の減少、主な農作物である米の買い取り価格の下落などにより、農業生産は低落しており、耕作放棄地は増加の傾向にあります。

また、畜産農家も外国産の飼料価格高騰などによる厳しい経営を強いられており、飼育頭数も、平成20年に511頭だった乳牛が、平成25年には407頭と、減少傾向にあります。

このまま推移すれば、地域農業が衰退し、集落機能の低下や耕作放棄地の増加などと相まって、一層の過疎化が予想されます。その流れに歯止めをかけるためにも、農業構造改革が緊急の課題です。

「つ」の光明

全国的にも栽培が広がっているのが、乳牛・肉牛などのエサとなる飼料用稲の栽培です。飼料用稲は、食用の米を栽培するより、手間が掛からず、農薬の使用量も少なく栽培できるという利点があります。



府中市においても、米の買い取り価格の下落に悩む農家の飼料用稲への転作が進み、平成20年に1ヘクタールの栽培面積だった飼料用稲が、平成27年には9.4ヘクタールとなり、年々増加しています。



稲作農家が作る飼料用稲を畜産農家が消費し、牛ふんから生産した堆肥を稲作農家・野菜農家が使用するという、上下地域内で資源が循環するしくみが、「耕」・「畜」お互いのメリットを作り出します。

稲を飼料にするWCS（ホール・クロップ・サイレージ）

飼料用の稲は、収穫前になると高さ150cm以上に成長します。10月ごろ、稲を刈り取り、ロール状にまとめることができる刈り取り機と、そのロールをビニールでラッピングするラッピング機と、運搬する運搬機3台を作業員2人で作業し、1日ほどで、0.7ヘクタールの田を収穫します。

ラッピングをするには理由があります。牛は、刈り取った飼料用稲をすぐには食べません。発酵させて、はじめて飼料となります。発酵を促進するため、ロールにする段階で、稲に乳酸菌を混ぜます。

この専用の刈り取り機とラッピング機と運搬機の購

入費用約1700万円は、国の「攻めの農業実践緊急対策事業」を活用して、購入費用の半分を国からの補助、残りを市と農事組合法人が負担し、維持費は、農事組合法人が負担します。

地域内連携による資源循環のしくみの意味とは

WCS（ホール・クロップ・サイレージ）用の稲の栽培は、地域内連携における資源循環を生み出しました。さらに、農事組合法人が作業を請け負うことで、上下地域内で全ての作業が完結することになり、より効率的に地元で作られた安全・安心度の高い肥料や飼料を農家が使うことができます。その結果、私たち消費者は、地元産で安全・安心な農産物を手に入れることができ、農家は、安定した収入を確保できます。

今後、今より耕畜連携を進め、地域内飼料の自給率を向上させ、畜産経営の安定化と耕作放棄地の減少を目指し、農地の有効活用をしていきます。